



文苑

○漢詩

驟雨

風伯驅雷般々來
忽看雲霧涼如水
沛然白雨洗蒼苔
月在東天照八垓

虛舟先生評 涼味可掬

秋思

更深砌下草蟲悲
無限感懷無限恨
露冷階前月影移
一聲過雁鬢成絲

送三妹倭子之彥根

倭子彥根去
涼風八月時
郊晴秋氣遠
天闊雁行遲
白日看將暮
湖山難可追
江州如見月
千里相思

虛舟先生評 句々有古色可誦

寄三妹在彥根

雲蔽南天雁陣悠
琵琶湖上煙波裏
思君夜々夢江州
鬢髻浮船語三津修

鎌倉覽古

當時霸府地
今日無殘礎
不說草離々
黃昏鳥雀悲

菊歌

菊兮菊兮
群芳已凋落
菊兮菊兮
三逕已就荒
清廉吾恥牡丹富
菊兮菊兮
風霜方凜烈
吾愛爾芬葩
爾獨何開華
吾愛爾暉々
爾獨何暉々
况又芍藥飾綺繡
吾愛爾清節
爾獨何皜潔

虛舟先生評 篇々皆可誦、而以送妹倭子詩、爲壓卷、蓋友于之情切至、不用雕繪、自然感人者歟、

國文

函嶺紀行

文科四年 鹽川 國

七月拾貳日 晴天

七時十五分發であるから六時に出發してもよいのだけれども嬉しいのではやくも五時五十分には出發してしまつた。春日町櫻田本郷町を経て新橋についたのは六時二十分。見まはして見ると仲間らしい人は見えない。はてはやすぎたかと思つてゐると小荷物預入所からひよつくりと大澤さん。お互ひにお天氣のよくなつた事を祝した。黒いつゝみと犬はりこの包を手にしてをられた。談話をしているとむかうから金田、本田の兩人が見えた、我等のをるのを一向御存知ない。次が岡田さん尾台さん初鹿野さん田中さんの順であつた。一同たゞ嬉々として笑んでゐるのみ。昨日の豪雨がかくも今日の快晴を齎すとは思はなかつたとはみんなの第一の挨拶であつた。田邊さん見送りに來らる。多謝々々。

番の後殿は西村先生であつた。白い洋服に寫眞機をかけ後より尻尾を出してゐられた。よく見たらそれはハンマーの柄であつた。湯本までの往復切符(壹圓七十錢十四日間通用)を求めて國府津行に乗つた。客は少ない。汽車は奇麗である。いづれもうれしい。田邊氏は汽車中まで荷物運搬。實に高等赤帽であつた。七時十五分ゆる／＼とごき出した。新聞を見はじめた。やがてあきた。車外を見るこれも熟知の道とて面白くない。

「會計係をきめませう。どうぞ東京のかたね」と云ふ聲が聞える。やがて定まるべき運命をもつ身、いやだ／＼と反抗して見ても面白くないと思つたので初鹿野さんと二人その任を引うけた。實に大藏大臣兼小使なのであつた。七時四十分さしあたり三圓づゝ徴集合計二拾七圓、白い木綿で作つた袋に大切にさめて初鹿野さん保管。國府津についた。即ち汽車をすて、國府津館に休んだ。そこで辨當を取りよせ名々肩に擔つてゆく。湯本行の電車が來た。止め

て見たが随分満員である。やめて次のにしやうかと思つたが卅五分またねばならぬと云ふので出かけた電車をまた呼びよめて乗つた。こんな呑氣な電車は田舎でなければ得られぬ重寶なものである。電車内には東京から一緒に来た病兵が乗つてゐた。皆青い顔をしてゐた。熱海の輕便鐵道の處で乗り換へたから多分温泉にゆくのであらう。車中の蠅の多いのには閉口した。しかもその蠅が病兵の顔にとまつてまた私の顔にとまるのだから。

かくて湯本についた。肩から辨當をおろして喫し充分に旅装を整へていよいよお山へのぼりはじめた。靴で踏み上らうと云ふもの七人草鞋がけのものが二人。若い強力は皆の荷を物もつてゆく。山路の景色はだん／＼とよくなつてきた。玉だれの瀧を見てとみに涼味をおぼえ心氣の爽快を感じた。だん／＼山路はけはしくなる。随分苦しい。我慢して上る中にまづまづ平かな道に來た。下には巢雲川が糸のやうに流れてゐる。鶯はどこにも／＼にも啼いてゐて我等を慰める。

草の中にはまつ赤の葎がなつてゐる。「あれがいざり勝五郎が小屋がけをした處です」と強力は教へた。巢雲川村はやはり目の下に一塊になつて見えてゐる。

汗をふきつゝ又上つてゆく。洋傘を杖にしたけれども太陽は強く照りつける。しかたがないからさうさう杖には別の木を拾つて間に合はせた。ほつと一息ついたのは初花の瀧であつた涼しかつた、うれしかつた。

又上り出した。いよいよ日光はてりつける木影など云ふものは少しもない。「辛いネー辛いネー」の連發でやつとの事で原宿についた。黒光りに光つた家でやすんだ。渴者はさうに茶を得たので飲むこと飲むこと大變なもの、一人で平均十杯は慥に飲んだ。此家の床の間に粗板が立てかけてあつた。その裏には

「明治十年今上御休みごころ」

とあつた。あんな苦しい所を明治天皇は御通り遊ばされたのである。よし御徒歩でなく御輿であつても御駕籠であつても随分おつらくいらし

つたであらう、おもへばおもへば文明の今日の有難さひしひしと胸に迫つてくるのを覺えるのである。又石のごろつく山路をたどりたどり上つて行つた。前よりも一層つらい、なせこんなに苦しんで物好きに御山へ上のであらうかなど時には想はないでもなかつた。

こゝはネー、長持落としといつて昔大名が通りりの時に雪など降つてゐる時にはきつとこゝで長持をすべらして破損する所なのですそれでこゝで壊した事については關所でも咎めなかつた、だからもつと前にこはしたのもでもそれをこゝで壊した事にするのです。

と若い強力は古い事をいつた。
だからこゝは随分辛い所です、この山の中で一番でせう。

なる程息がつまる様であるけれどもこれしきの事と勇氣を鼓して上つた所に一軒の茶屋があつた。前髪の所だけ白いすこい婆さんがゐた。例によつて「おかけなさい、お茶召していらつしやい」と云ふ。うれしくてすぐ腰をおろした。

こゝは眺望よろしく遠く國府津までも見えるさうであるが今日は少し霧がかつて見えなかつた。づらつとならんで寫眞を撮つていた。いた「私はきつと笑つてゐてよ」「私は下むいてゐたは」などどり／＼に云つた。

又こゝでも盛んにお茶を飲んだ、先生と強力とは力餅の御用があつた。金田さんはこんな所でも例によつて夏みかんの御用があつた。

こゝからおもしろい老爺と一緒になつた。年は八十二才だと云うてゐた。そして今やすんだ所は何と云ふ所ですと問へば「手帖には榎木とつけておかしやつさい」と云ふ。この男よく人を案内しつけてゐるなと思つたから。

「お老爺さん、一体いくつからこの山のぼりをしてゐるの？」

「私は十三からしてゐます、そして其頃八十位の老人にいろ／＼話を聞いたから恰度百五六十年度の間の話は確に知つてゐます、私は今茲にゐるが生れは泉州のものです」小松の宮様もよい御方だつたし今は殺されてをらつしやらぬが

伊藤さんも偉い人だった。どこから智恵が湧いて来るのかわからないがね、箱根に上らつしやる時でも巡査がついてくる私たちがそばについて行けばもつと離れると云なる、伊藤さんは笑ひながらもつとそばへこいそばへこい、駕籠屋がそばへこなくて駕籠がかつがれぬからな。とかう云うて下さしやる。ほんとに偉い人だつた。大山さんも顔に紋のある大きな人だつた。よい人だつた。今は昔の様にどんと偉い人の御供はしませぬ。今日も箱根ホテルから御客様を送つて下までいつて来た。下は暑いネ、どうしても運動しないと体の工合が悪い。運動はようがすな、時に旦那はよく見るがほんとによい事ですネ！」としきりに先生をもちあげてゐた。それからそれへと話はうつり遂には人の魂は蛆虫だとか何とか云うて大した人生観となつたおかしなことおかしなこと急な山路も知らなかつた。やかて老爺の話もしづまつたと思つたら、「急に足が重くなつた」と誰やらがさやく。あらほんとにと思たら非常な急坂であつた老爺

も苦しいから話をやめたのであらう。その坂を越すと又話をはじめるとどうどう長持歌までうたひ出した。そろ／＼道は下り坂となつた。かくてこの老爺の話の結論は明日の荷物を自分にかつがして呉れと云ふのであつた。本箱根の町へ出た時の杉の葉の美しかつたことはとても忘れられぬ。東京のあの泥にそまつて素の色を失つて赤色になつたものばかり見てゐた目にはこゝに驚かざるを得なかつたのであつた。こゝで老爺と別れて吾等は箱根神社に参詣した。周宮、常宮御手植の高野槇は神社の兩側にあつた。曾我兄弟の事など思ひつゝ多くの階段を降りて湖畔の石にごつしりと腰をおろした。塔の鳥は恰度クリミヤ半島の様に湖中に飛び出してゐた。其の上に西洋館の離宮があつた、蒼い蒼い水のほとり、山も青ければ空も蒼い。二子山も左に眞青にうき出てゐる。あゝ手あれば繪に、才あれば詩に、雅あれば歌にこの景色をあらはさんものをも思つたが悲しきは我が無能、何もものする事は出来なかつた。

名残をのこしてそろ／＼と歩み出した箱根街道をたごりて杉並木をこえてゆく、有名な關所の跡は人或はかへり見ぬばかりに荒れてゐた。見かへりの松は誰が見かへつたのであらう。やれやれ關所を通り越したと云ふてふとかへり見たものであらうか。

こゝを過ぎればすぐ箱根ホテルである。

桃色の洋服をきた大きな西洋婦人が子供と共に歩いてをる前を通つてホテルの中に入つた。主人をはじめ女中共出迎へてをる。花の前でさへ顔はづかしき旅衣なのにまして人の前、大にはづかしかつた。二階に導かれてまづ疲れた足を伸ばした、芦の湖の前に見て。

もう箱根細工をうりに来た實にうるさい。御湯に入り浴衣にさかへ新しいおさしみで御飯をいたゞいた時の心持よさ、卓子を圍んで皆は又方々へ端書を出す。一同より校長關根先生、生徒監田邊氏に出した。西村先生が上書と文句とを書いて下さつて皆が連署した。端書かきはいつまでも終らぬ、けれどもよいか

げんにり切あげて八人枕をそろへて心地よい布団にくるまつて寝た。

七月拾參日 晴天

四時半から目はさめた。天氣は上々、いやな臭ひがするのはバタ入のパンの腐敗したのであつた。捨てよう氣振に芦の湖に捨てようと思つた。窓をあけたが果されなかつた。と云ふはごかの學生が二人しきりに寫生をしてゐたからであつた。日は漸く上つてくる芦の湖にうつる逆富士はいよいよ鮮になつてきた。頂にある雪さへもはつきりと寫してゐる。ふと見ると先生がボートに乗つてゐらつしやる、急いで降りいつて小さなのに九人ものつた。オールは軽く水を分けて進む實に心地よい、しかし一方には江戸川事件を思はないのでもなかつた。半時間ばかりしてまたかへり、朝飯後旅装を整へて出發した。舟で芦の湖を渡る、眞青の水眞青の山四圍すべて青である。舟は湖尻についた。茶屋にやすむ、鶯がそこゝに啼いてゐる。きのふと引かへしきりに足の輕きを覺えて坂路を上つて行く。薄

の葉のつやつやしいのに日光が照りつけてびか
びか光つてをる。「草のかやき、草のかや
き」と本田さんはしきりに云はれてゐる。何か一
首出来そうなものだ。かくて焼きつける様な日
光を浴びつゝ上つて行くのである。

草鞋連は紐が解けたり脚絆のこはせがはづれた
りしていつも後殿である。尾上先生の「日記の
はしより」によつて我等の知己となつた馬酔木
はこの山到る所に生えてをる。だんく上つて
行くと急に硫黄臭くなりあの新しい芦の湖附近
の空気を小包にでもして送つてほしくなつて來
た。四方の深縁に引かへこゝは焦土岩石散亂
實に地名大地獄の名にそむかぬ所である。むし
つと暑い臭い風が吹いて來る。茶屋に休む。又大
に呑む。水はどこから汲んで來るか問へば山
の下からですと云ふ。それではあんまり澤山飲
むのはやめようと云ひながら七八杯のんだ。
噴火口にてマツチをすつてごらんさい

大湧谷茶屋

さかう先生は紙に書かれて女に門口に無理に貼

らされた。かうして燐寸を賣つて儲なさいなど
云うて此地を去た。之から又さるつく石をふみ
こえふみこえして強羅に行くのであつた。上る
のよりも降る方がつらい後殿でやつとの事強羅
についた。行厨を喫してこゝで地理的研究をし
た。こゝより羊腸の坂にはあらで大分太い道と
なつた。東洋第一の公園と自ら稱する強羅公園
を過ぎて下つてゆく。もうあの見える所が底倉
であのかゝりの家が我等のとまる葛屋であると
云はれてあまりに近かつたので吃驚した。早す
ぎるから宮城野公園によつて亭に休んだ。繪は
がきを持って來た。そのおかみさんについて來た
女の子があつた。「いくつ」ときけば紅葉の様な
手をみんなひろげた、そして常にゑくぼを作つ
て笑つてゐる。「名は何と云ふの」「おせん。姉さ
んはおすて、父さんは折本二郎母さんはおよし」
と云ふ。頗る利口な子供で可愛らしい。かくて此
一家族の人数がすつかりわかつてしまつた。
葛屋についたのが四時頃でくつろいで御湯に入
つた。ほんとによい氣持であつた。夕飯を戴い

たがきのふのやうに美味でない。夕葛屋の高山
園へ吾等九人上つた。九十九折なる道を上つて
ゆくと不動の瀧があつたそばにある亭に腰をか
けた。重い太い人ばかりなのでやゝもすると腰

かけが折れそである。いろいろの話が出る。
大ばこの話が出れば茶苜を采り采ると詩經が出
るし、ほんとに今日の御天氣は天祐ねと云へば
「天祐を保有し万世一系の皇統をふめる」と日露
戦争の勅語が出る。何と云つても同じ級で共に
學んだ事に結びつく。日はくれはてゝ薄暗くな
つたのでかへる事にしたのは七時であつた。
宿について地圖によつて繪はがきの測定をした
面白かつた。地理旅行の目的を發揮した様な氣
がした。それから机上をかたづけ茶話會がは
じまつた卓上にあるものは名産の自然薯煎餅四
方山の話に時の過ぐるも知らなかつたが十時半
にもなつたので閉會にした。

おせんのこすな腹こやせ

さあさあ皆平げませうと奮發したがおせんは殘
つた。しかし腹は肥えた。又御湯に入る。清いか

らだを糊のさつぱりした、清いねまきにくるま
つて愉快に床に入つた。二十七圓の中懐中僅に
拾貳圓四十六錢となつた、ちと心細い。

七月拾四日 晴天

繻々たる谿流に耳は攪せられ甘き眠は醒された
時にははや太陽は前の明星山の中腹に半分顔を
出してゐた。「おきよと人によばれぬ先に」と飛
び起きて鳥におどらぬ心組で一番先に髪を結び
また例の御湯に入る。

あまいあまい御菜ですゝまぬ食慾を無理にすゝ
めさせたが中々進まなかつた。八時この宿をす
てた。豊太閣の石風呂を見、宮の下を通り九十九
折して太平台についた。風景大によろし。寫眞を
撮つていたたく。下り下つて塔の澤の水力電氣
の所を過ぎ目指す湯本についたのは十一時半、
湯本細工に皆々土産袋をふくらせた。電車で小
田原迄ゆき下車して報徳神社に詣でた。茶屋に
休み行厨を喫す。食慾進まず二時間ばかり休ん
で電車にて國府津についた。「私は脚が痛い、私
は足がいたい、私は趾がいたい特に小趾がいた

日光より友へ

文科一部三年 安永みち

い」などとりどりに云つた。國津館の座敷に上つて發車までゆつりやすんだ。こゝで會計の總勘定をした所も十錢づゝ徴集せねばならなくなつた。そして差引一錢残つた。明治十九年鑄造の青銅貨であつた。これは級會へ寄附して奨學資金にませうと、大切に私が保管した。ゆつくりやすんでこの旅行の樂しかつた事を追想した。「さあもう時間になりました」と女中が云ひに來たのでいつて見ると汽車の出た二分ばかりあと。實につまらない。四十分まつて五時三十分で上つた。下る人は五時四十七分、いよいよおさらばになつてしまつた。西日はひどく車窓を射てゐる。車内のはなしはそれからそれへとつゞき或は笑ひ或はおどろき或は眞面目になる、大船で辨當をつかつた。かくて先生は品川で下車遊ばす。あとには五人樂しい樂しい旅行もこゝに終をつける事になつた。かくて新橋について各々向ふ方面の電車に乗つて別れたのであつた。

中禪寺湖畔より一筆申上げ候。彼方の山々にゆきかひし雲のちぎれも見えずなりて夕暮は我が肩に背に迫り申候。山も水も我れも人も一つ色につゞまれて無限の境にある心地いたし候この間に急き筆とりて君が未見の知己を御紹介いたすべく候。

九十九折なる彼の瀧壺の道を降りていちはやく五郎平茶屋に到れば瀧は突然現れ申候。眼前數米突の空間に出現せし巨瀑は皮肉なる批評家の如く我に向ひ、驚嘆すべき哲人の眼して我を覗ひ大宗敎家の偉大なる態度もて我を迎へ申候。勢躍玉龍、響奔鐵騎、使人目眩氣奪。私はその眞相を語る語を知り申さるも此等の數句が偽に近きを知り申候。犇々と迫り來る威力に全身の血管は縮まりそここゝに輕き微けき肉の痙攣を作し申候。神秘の畫面になくてならぬ雲はこゝにも動き居り候。來迎の聖者をのする雲より

は更に命あるものにて候。此處に投せし青年に就きて吾等はよく語りしものにて候。君も我も其の頃は唯幼き狂熱の觀客にて候ひき。彼が内心生活の如何なりしか知らむとだにせざりし吾等はこの驚異すへき自然を舞臺として仕組まれし劇の華やかさにあらゆる讚辭と同情とを傾け申候ひき。こゝに至りて彼の矛盾は一致いたし候。彼の悲觀は樂觀と化し申候。彼の行くへき道は是れ唯一つにてはあらざりしむらなも二重の生活を苦痛とし「肯定にあらざれば否定」その間に一毫の間隙をも存せしめ得ざる彼の眞實は私共の最も要望する態度にて候。私共は「抵抗なく努力なく葛藤なき」なるがまゝの活き様を以ては遂に生を創造し得ざるを確信いたし候。この點より私共は彼の名か一種の代名詞となりしを悲しむ者にて候。

湖は總て懐かしきものにて候。野の湖より山の湖が更になつかしく候。こゝの湖をつゞむ山々はいま紅葉の眞盛りにて候。されど自分の目が見る程の色を表す語だに知り申さる私に豊かなる君か畫趣をそゝりえさるを遺憾に感じ申候

柔かき輪廓の山々はその形にふさはしき色に描かれ申候。佐保姫と云ふ名はおとなしき色調を彩雲といふ語は配色の巧妙さをかたる心地いたし候。水もコバルトに近き青にて全体の色調を助くる唯一の色かとも思はれ申候。その水の面岸近く漕がせては君が不斷の徵象の境に入る思ひに倒影の木の間をさまよひ申候。されど數時間の後私は眞の君が詩境に生くるを感じ申候。そは雨の戰場原にて候。昔山に住む神々が夜な／＼戦ひしたりと君に聞きし戰場原の雨の夕べにて候。わざ／＼上京してまで見たしといはれしさる上野の博覽會場内の落葉松はこの野のはてよりはてに立ちならひ黄はみし細き葉は涙の如くこぼれ居り候。樺色のなげきカフエーの勾ひ音にせはそは肉聲のふるひふるひするメロデーにてや候はむ。格好のバックを作る男体白根の山にはコントラバスの伴奏を思はせ申候。思ひ出してはふりいだす雨は半音の裝飾音にてか。要するに深みある短音階的情緒豊かにたゞよひ居り候。全く君の詩の調子にて候。自ら彼の